国鉄闘争全国運動六・九全国集会に一八〇〇人が結集！
国鉄闘争を闘って労働組合を甦らせよう！

S支部　Y

六月九日（日）東京・文京シビックホールにおいて「国鉄一〇四七名解雇撤回！国鉄闘争全国運動六・九全国集会」に、支部五名で参加してきました。

司会は港合同を代表してS支部の木下書記長と東京西部ユニオン・アメリカンアパレル分会の女性労働者が努めました。

木下書記長から「この一年間職場や地域で闘ってきたと思います。私たち港合同も呼びかけ人であった、大和田事務局長や辻岡執行委員の相次ぐ逝去がありました。このお二人の遺志を引き継いで、地域闘争と国鉄闘争の勝利に執念を持って闘ってきました。医療法人南労会をめぐる二十二年間の闘いも、この三月十一日勝利和解を勝ちとりました。戦いのうねりをこの集会で共有し新たな戦いへ踏み出しましょう」と司会挨拶がありました。

開会のあいさつで世田谷区労働組合協議会の花輪顧問から「集会に参加された皆さんと怒りを共有したい。その怒りとは、ひとつは政権による改憲の動きです」と改憲と戦争、沖縄新基地建設、総非正規職化に突き進む安倍政権を弾劾する発言でした。

連帯の挨拶は、全国一般東京ゼネラルユニオンの代表と三里塚芝山連合空港反対同盟・北原事務局長が行なわれました。

呼びかけ人の全日建関西生コン支部の西山執行委員、伊藤晃氏（日本近代史研究者）、金元重氏（韓国労働運動史研究家）から階級的労働運動の復権に向けて熱い訴えがありました。

国鉄闘争の火をもっと大きく、と動労千葉からの報告に立った田中委員長は、冒頭「民間活力の爆発」をキーワードとする安倍成長戦略を弾劾しました。

「国鉄分割、民営化以後二〇数年にわたって展開されてきた新自由主義政策は全て破綻した。アベノミクスも崩壊し、その時に闘う労働組合が存在するのかどうかだ」と

し、現在の攻防の中で国鉄闘争が持っている位置の重要さを示した。

そして、この一年間の一〇四七名闘争の報告をし「情勢は可能性に満ちている。九月二五日までの四カ月間に、これまでの努力を注ぎ込もう。動労千葉は外注化を強行された職場から必ず立ち上がり、組織拡大を実現し、解雇撤回闘争を絶対に投げ捨てません。今日をその新しい出発点にしよう」と呼びかけられました。

さらに、動労千葉鉄建公団訴訟が重大局面を迎える中で、特別報告に立った葉山動労千葉弁護団長は、昨年六・二九一審判決と控訴審で提出した新証拠の意義を分かりやすく説き明かし「弁護団は、最後の日まで徹底的に闘う」と表明されました。

次に一〇四七名解雇撤回・動労千葉争議団の高石団長は、東京高裁・難波裁判長の五・八結審強行を弾劾し「判決日までに一〇万筆の署名を集め、大反動をひっくり返そう」と訴え、同じく六月十九日、我が支部の夏季闘争の集会にも連帯あいさつされた中村執行委員から「我々がなぜ闘っているのかというと、不当に解雇されたからです。解雇は絶対許さない、この一点で労働者がひとつになることが我々に求められることだと思います。ひとつになり資本を倒しましょう。我々が勝つ時代に来ていると思います」と決意を述べ、国労秋田闘争団の小玉氏、国労小倉地区闘争団羽廣氏も全人生をかける決意で闘うと表明しました。

さらに「解雇撤回・ＪＲ復帰」の一〇万筆署名のアピールを自交総連北海道地連の杉本書記長が行いました。外注化阻止へ現場から報告と決意、そして国鉄闘争と連帯して闘う被災地・反原発・改憲阻止・沖縄からの闘いと力強い報告がありました。

職場からの闘いの報告と決意もあり、集会宣言を動労千葉を支援する会の山本事務局長が読み上げ、全体の拍手で採択されました。

ス労自主・入江委員長が閉会のあいさつを行い、全金本山労組・長谷副委員長の音頭で団結ガンバロー、動労西日本・大江

委員長のリードでインターナショナルを大合唱し集会を終えました。

全国から一八〇〇人の結集で会場が熱気にあふれた集会に参加することができ、一三夏季一時闘争の勝利に向け、明日から闘いに全力で取り組もうと決意し家路に着いた。

感想

S支部・M

国鉄闘争全国運動六・九全国集会に我が支部からの参加者五名の中に加えられ参加してきました。

大阪を出る頃には曇天という空模様でしたが、東京に着くとスッキリ快晴で暑いくらいでした。会場の文京シビックホールは東京ドームの間近で、降り立った後楽園駅からも目と鼻の先の場所にありました。昼食後に会場内に入りましたが、人、人で座る席を見つけるのも一苦労で、休憩時には喫煙場所で大きな紫煙が立ち込めていて、さすがに一〇〇〇人を超える全国規模の集会は違うなと感じました。

木下書記長の司会挨拶から集会は始まりました。当然の事ながら集会は国鉄闘争が軸なのですが、沖縄の基地問題や、福島の原発・放射能の問題、学生運動、果ては橋下市政や維新の会に至るまで多岐に渡っていました。

どの報告を聴いていても共通して感じることは資本・権力などからの不当な攻撃に対する強い怒りです。インターナショナル、団結ガンバローで集会は幕を降ろし、新大阪行きの新幹線に揺られて帰路に着きました。

国鉄闘争は今年で二六年目を迎えるそうです。当時の中曽根首相が国鉄労働者の首切りと労働組合の壊滅を目指して行ったもので、これが現在労働者を脅かし、公然と行われている民営化、外注化、非正規雇用の出発点であると言います。だとするならば、全ての労働者にとっても会社や業種や住んでる場所が違ったとしても問題を共有し、団結していくということは理にかなっていると思いました。

企業内だけでは労働条件は良くならないという事も少しは分かった気がします。

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！